

平成 30 年 4 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06919

研究課題名(和文)パーリ聖典における梵我一如思想の併存

研究課題名(英文)A Coexistence of the Atman-Brahman Concepts in the Pali Canon

研究代表者

名和 隆乾 (Nawa, Ryuken)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：20782741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：インド初期仏典中には梵我一如思想が2つ併存する。1つはバラモンによる、四無量を通じて最高神brahman-(梵天)への到達を説くもの。もう1つは仏教徒による、仏教徒が最高の境地とする涅槃をbrahman-と称し、そこへの四諦による到達を説くものである。これについて、仏教徒はバラモンの主張を認め、四無量を仏教の修行道中に取り込んだ。一方で仏教徒は、梵天は最高神と言えど輪廻に囚われた者であり、輪廻から脱した涅槃への道を説いたのがブッダであると主張し、仏教の優位性を保とうとした。なおこの修行構造では、最高神brahman-への到達を目指す修行は、仏教徒のbrahman-つまり涅槃へ向かう事にもなる。

研究成果の概要(英文)：There are two kinds of the concepts on the equation of Atman (self) and Brahman (the highest existence) in the Pali canon. On the one hand Brahmins insisted that they can reach the highest deity Brahman through cultivating the four Appamanas, on the other hand Buddhists took Nibbana as the highest state Brahman and insisted that they can reach Nibbana through cultivating the four Ariya-saccas. The Buddhists approved of the concept of the Brahmins and took it into the Buddhist training course. But the Buddhists claimed that the deity Brahman is nothing more than the being caught in Samsara and the Buddha clarified the way to Nibbana, namely, the state escaped from Samsara. The Buddhists thus tried to have superiority over the Brahmins without denying their concept. In this structure of the Buddhist training course, even if people train to reach the highest deity Brahman, it actually means that people proceed to the highest state Brahman of the Buddhists, namely, Nibbana.

研究分野：インド初期仏教文献学

キーワード：初期仏教 パーリ聖典 梵我一如 brahman ブラフマー神 四無量心 慈悲喜捨 ブラフマニズム

### 1. 研究開始当初の背景

紀元前6世紀頃のインド文化を伝える古ウパニシャッド文献によれば、当時のバラモンは、最高原理 *brahman* (梵) と *ātman* (我) との合一を究極的境地として目指す、いわゆる梵我一如思想を信奉していたという。その後、紀元前4-5世紀頃に仏教が現れるが、その頃の様子を伝えるインド初期仏典中に、前述の梵我一如思想の痕跡を見る事が出来る。

インド初期仏典中の梵我一如思想については、従来も断片的に言及されてきた。この研究には大別して2種ある。1つは仏教徒の主張する梵我一如思想を扱ったもの、もう1つはバラモンの主張する梵我一如思想を扱ったものである。

前者を扱った主な研究として、宇井伯壽 (『印度哲學研究』第三卷, pp. 63ff., 1965) を受けた雲井昭善 (「ニカーヤにおける *brahma*-と *dhamma*-との対句用例」『佐藤博士古希記念』, 1972, pp. 61ff.), K. Bhattacharya (*L'Ātman-Brahman dans le Bouddhisme ancien*, Paris, 1973) が挙げられる。彼らによれば、仏教徒は自らが究極的境地とする涅槃を *brahman* (梵) と称し、それへと自身(我)が到達すること(梵我一如)を主張したという。

一方、後者を扱った研究としては、M. Maithrimurthi (*Wohllollen, Mitleid, Freude und Gleichmut*, Stuttgart, 1999) が詳細である。これによれば、インド初期仏典に現れるバラモンは、四無量心と呼ばれる修行の実践により、当時の社会における最高神 *brahman* (梵天) へと自身(我)が到達すること(梵我一如)を説いている。そして、この梵我一如思想は、古ウパニシャッド文献に現れるバラモンが最高原理 *brahman* への到達を目指しているのとは異なっていることをも指摘している。

さて、上述の2種の研究は、基本的に仏教徒かバラモンの梵我一如思想のどちらかのみを扱った。稀に、自らが扱うのとは異なる梵我一如思想の存在に気が付いた研究者もいるが、その言及は僅かな紹介に留まる。つまり斯学では、インド初期仏典中に異なる梵我一如思想が併存している事は、これまで注目されることはほぼ無かったことになる。

### 2. 研究の目的

上述した従来の成果を受け、本研究は次の2点を主な目的とする。(a) 初期仏典中に残る全ての梵我一如思想を抽出し、整理する。(b) 仏教徒が、バラモンをはじめとする異教の梵我一如思想にどの様に対応したかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究は、次の3工程によって達成される：  
(a) インド初期仏典から *brahman*-という語を

収集し、読解して分類する。ただしインド初期仏典には異なる仏教部派による複数の伝承が現存する。このうち、本研究では、唯一フルセットで現存するパーリ聖典(南伝上座部所伝)を主資料とする。まずは当該資料から *brahman*-という語の用例を網羅的に収集しておき、更に二次文献によって各用例の併行資料を集めるのが効率的である。ただ、残念ながらパーリ聖典の *brahman*-という語に関してはコンコードランス等が存在しない。そこで、電子検索によって用例収集を行う。パーリ聖典はその全体が既に電子化されており、特に Vipassana Research Institute の提供する電子テキストは信頼出来る。併行資料を収集する為の二次文献としては、赤沼智善『漢巴四部阿含互照録』(1958)や Jin-il Chung, *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama* (Tokyo, 2008), Jin-il Chung & Takamichi Fukita, *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Madhyamāgama* (Tokyo, 2011) が特に有益である。(b) 前項によって抽出された用例群から梵我一如思想に関するものを抽出し、それが仏教徒やバラモン等、如何なる宗教家に関わるかに基づき分類する。以上によって上記の研究目的2(a)が達成される。更に、(c) 抽出された仏教外の梵我一如思想に対する仏教徒の態度の考察、並びに仏教徒自身の梵我一如思想と仏教外の梵我一如思想との比較を通じて、研究目的2(b)が達成される。

本研究課題では、*brahman*-に関する用例の精確な理解が鍵となる。そこで随時、パーリ聖典については榎本文雄教授(大阪大学)、仏教写本については辛嶋静志教授(創価大学・国際仏教学高等研究所)、漢訳仏典については加治洋一教授(京都光華女子大学)との意見交換を行う。また本研究課題は、仏教以外の古代インド宗教とも関連する為、以下の研究会等への継続的な出席を通じて各専門家との交流を重ね、情報交換を行う：京都大学人文科学研究所・共同研究プロジェクト「ブラフマニズムとヒンドウイズム」(京都大学・藤井正人教授主催)、ジャイナ教律文献研究会(都城工業高等専門学校・藤永伸教授主催)。また、古ウパニシャッド文献をはじめヴェーダ文献については堂山英次郎准教授(大阪大学)に、ジャイナ教については河崎豊助教(東京大学)に随時意見を求め、扱う用例の全てについて、可能な限り精確な理解に努める。

### 4. 研究成果

*brahman*-という語の包括的な調査の結果、インド初期仏典中には、計2種の梵我一如思想のみが現存することが分かった。つまり、既に述べた仏教徒によるものと、バラモンによるものとである。ジャイナ教は仏教の姉妹宗教と言われることもあるが、インド初期仏典中には、そのジャイナ教徒が独自の梵我一

如思想を主張したとの記述は見出されない。なお、ジャイナ教文献における brahman- という語の用例の殆どは、様々な神格が列挙される中の 1 柱として人格神 brahman (梵天) を指すか、人々が守るべき戒の 1 つ、不邪淫を著す複合語 (brahmavrata-) の中に見られる。またジャイナ教文献では、仏教とは異なり、人格神 brahman が積極的な役割を果たす用例を見出す事は困難である。

ところで、古ウパニシャッド文献におけるバラモンが目指すのは最高原理 brahman であるのに対し、インド初期仏典におけるバラモンが目指すのは最高神 brahman である。この様に、両文献に現れるバラモンの梵我一如思想には齟齬が見られる。しかしこの様な齟齬が何故起きているのかは、従来の研究によっても、今回の報告者の研究によっても明らかになっていない。この解明については今後の課題としたい。

次に、仏教徒による異教の梵我一如思想への対応について、この問題は上述の調査結果により、仏教徒はバラモンの梵我一如思想にどの様に対応したか、に置き換えられる。これについて、仏教徒はバラモンの梵我一如思想をその通りに是認した。しかも、最高神 brahman へ到達する為の修行法とバラモンが主張する四無量心を、仏教徒は自らの修行道中の高位に位置づけている。一方で仏教徒は、バラモンの崇拜する最高神 brahman でさえ輪廻に囚われた存在でしかなく、輪廻から脱した究極の境地 brahman、つまり涅槃への道 (四聖諦) を説いたのがブッダであるとし、仏教の優位性を保とうとした。

ところで、インド初期仏典を見る限り、当時の俗人たちの多くは、涅槃の様な世俗を超越した境地よりも、神々に生まれ変わって天の楽を享受することを望んだと推測される。これについて、上述の様にバラモンの梵我一如思想を取り込んだ仏教徒の修行道の構造では、仏教に転向した者が最高神 brahman への到達を目指して修行を行う事は、同時にそのまま、実は仏教徒にとっての究極的境地 brahman つまり涅槃へと進ませる事にもなる。

上記の構造からは、俗人の願望やバラモンの価値観を全く否定することなく仏教の優位性を保ちながら、かつ、仏教の理想とする涅槃へ自然に向かわせるという、巧みな受容態度の一端を見ることが出来る。

更に、本研究課題の遂行中、京都大学人文科学研究所藤井正人研究班の主催するシンポジウムへの登壇等における他分野の研究者との交流を通じて、四無量心という修行実践の起源について見通しを得ることが出来た。そこで、その詳細の解明を次なる課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

名和隆乾「nāmarūpassa avakkanti-について」『印度學佛教學研究』, 66,2, pp. (52)-(57).

〔学会発表〕(計 5 件)

名和隆乾「パーリ聖典における梵我一如の併存」, 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドウイズム: 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」定例研究会, 2017年1月20日, 京都大学人文科学研究所.

名和隆乾「パーリ聖典における cha- Xkāya- について」, 平成 28 年度第 2 回バウッダコーシャ研究会, 2017年3月11日, 国際仏教学大学院大学.

名和隆乾「パーリ聖典における cha- X kāya- と Samyuttanikāya 12.2 について」, 第 8 回ヴェーダ文献研究会, 2017年3月12日, 淑徳大学.

名和隆乾「nāmarūpassa avakkanti-について」, 日本印度学仏教学会第 68 回学術大会, 2017年9月2日, 花園大学.

名和隆乾「パーリ聖典におけるブラフマー神の諸相」, 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドウイズム: 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第 3 回シンポジウム「古代・中世インドの [神話] [説話] [表象]」, 2017年10月7日, 京都大学人文科学研究所.

〔図書〕(計 1 件)

加治洋一・漢訳仏典研究会(編)・中西麻衣子・名和隆乾・古川洋平・阿賀谷智宏(著)『『義足経』研究の視点 附・『義足経』訓読』, 自照社出版, 2018(出版予定).

上記の他、京都大学人文科学研究所藤井正人研究班によって出版が予定されている図書への寄稿を予定している。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

academia.edu:

<https://osaka-u.academia.edu/RyukenNawa>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

名和隆乾（Nawa Ryūken）

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：20782741

### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

### (3)連携研究者

( )

研究者番号：

### (4)研究協力者

( )